岩手日報　2022年（令和4年）1月23日（日曜日）

待合室の花 遠野駅物語

華道教室営む多田礼子さん(89)

生け花奉仕 半世紀
「心支え、華やぐ場に」

人生が交差する駅は、いつも華やいだ場であってほしい。遠野市東舘町で華道教室を営む多田礼子さん(89)は半世紀以上、そんな思いでJR遠野駅の待合室に花を生け続けている。子育てに奔走した充実の年月も、夫と死別した失意の日々も、駅を花で彩り、それをめでる人々と触れ合うことで生きる力をもらってきた。「自分がそうだったように、また誰かの心を支え、動かせたなら」と願い、1輪を手にする。

心を込め花を生ける多田礼子さん。苦楽を多くの利用客と分かち合ってきた大切な場所だ＝JR遠野駅

体の芯まで冷える遠野の冬。ストーブのぬくもりがうれしい同駅待合室のベンチに腰掛けると、美しい生け花が目に入る。「暖かくて、すぐしおれちゃうかな」。会話を楽しむように、多田さんがトルコキキョウやチューリップなど色とりどりの花を生けていく。瞬く間に自宅にいるような、ほっとできる空間が出来上がった。多いときで毎週、駅に通って五十数年になる。

同市穀町出身の多田さんは、幼いころから芸術に親しみ、遠野高では美術部で油絵制作に没頭した。卒業後は洋裁の仕事をしながら茶道や華道を学び、26歳で税理士の孝さんと結婚。30歳を前に華道教室を開いた。1男1女に恵まれ、子育てと教室を両立させる充実の日々。この頃、小学校時代の恩師に頼まれ、同駅での生け花奉仕を始めた。

だが、自身が37歳の時に孝さんが病没。奉仕を続けられるか悩んだが、駅で花と向き合えば自然と心が晴れた。旅人からにじむ高揚感、幾重もの出会いと別れが交差する非日常感。「多くの人の心の機微に触れ、前向きな気持ちを得ることができた」と振り返る。

それまでは幾分、義務的でもあった生け花奉仕が、多田さんになくてはならない、心地良い時間となっていた。花を囲めば駅利用者との話も弾む。小さい駅ならではの濃密な時間は華道を究める励みになり、58歳で小原流の最高位「一級家元教授」資格を得た。

その後、駅の美化に貢献したとしてJR東日本社長賞、東北運輸局長賞を受け、2021年には鉄道関係功労者の国土交通大臣表彰にも輝いた。川口春貴（はるき）遠野駅長は「これほど息の長い取り組みは全国でも例がなく、貢献は計り知れない」と感謝する。

「年を重ねるごとに遠野駅への愛着が増している」と多田さん。大勢で混み合う往年のにぎわいを知る身としては、利用者が減少傾向にある現状に寂しさも感じる。だからこそ「自分がそうだったように、誰かの心を動かす華やいだ場所であり続けてほしい」と、また駅へと足を運ぶ。